様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３３９０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００７４４

研究課題名（和文）看護を学ぶ留学生のためのライティング教材の開発とその基礎研究

研究課題名（英文）Research and Development of Training Materials for International Nursing Students

研究代表者
山元　一晃（YAMAMOTO, Kazuaki）

金城学院大学・文学部・講師

研究者番号：７０７９９８６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、(1) 看護を学ぶ留学生が授業や実習で課される課題を行うにあたっての困難点を明らかにすること、(2) 留学生の看護学部での学びをスムーズにするための教材を開発することを目標とし、看護教育において課される実習記録などの言語的な側面に関する調査、看護教員に対するインタビュー調査およびアンケート調査、さらに、看護留学生に対するインタビュー調査を行った。その結果、言語面において、実習記録特有の語彙や表現があることがわかり教材に反映することができた。インタビューおよびアンケートからは、状況や場面に合わせた言語使用の使い分けなどに困難を抱えていることが分かり、教材の構成を練るのに役立った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
支援に役立つ教材を開発することによって、看護を学ぶ留学生が、資格を得て、病院等で看護師として勤務するというキャリアを確実なものにすることにつながる。留学生が看護師として就職することによって、医療従事者の多様性を担保し、増加する日本語を母語としない患者に対する看護の質向上につながる。また、留学生支援のノウハウを蓄積することで、留学生を受け入れることの障壁が低くなり、留学生受け入れに舵を切る大学や専門学校が増えることが予想される。卒業後のキャリアをイメージしやすい看護学部等が選択肢に入ることで、日本を留学先として魅力的に感じてくれる留学生が増えることも予想される。l

研究成果の概要（英文）：The objectives of this study were: to identify the difficulties faced by international nursing students in performing the tasks required in class as well as during practical training, and to develop educational materials to facilitate their learning at the School of Nursing. Besides conducting an interview survey and questionnaire survey of nursing faculty members, we also interviewed international nursing students. It was found that there is jargon unique to practical training that is reflected in the training materials. The results of the survey indicate that the students had difficulty using the correct terms in relevant situations , which was helpful in developing and re-structuring the training materials.

研究分野：日本語教育学

キーワード：看護留学生　実習記録　語彙　看護教員　教材開発

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

外国人留学生受入募集要項を用意する４年制大学の看護学科等は日本学生支援機構(https://www.jasso.go.jp/ryugaku/study_j/search/daigakukensaku.html, 2018 年 9 月 26 日アクセス)によれば、少なくとも 59 学科ある。看護学科を有する専門学校等もあることを考えると、看護師を目指す留学生は一定数いることが予想される。

看護学科等では、初年次から実習があるのが一般的である。その課題として求められるものには、多様な様式に記入する記録もあり、一般的な論述式レポートの提出だけではない。これらの様式は、項目ごとに箇条書きで書いた方が良い箇所、簡潔な文章で書く箇所、患者等の言葉をそのまま書く箇所等があり、様式や項目によって多様な形式での記入を求められる。そのため、第二言語として日本語を学習した留学生にとっては困難を感じることもあると想像される。実際、経済連携協定(EPA)に基づく看護師にとっても、看護記録等を書くことが困難であることが指摘されている。たとえば、看護記録を「書く」ことについて、EPA による看護師の 34.1%が「できるときもある」、4.5%が「できない」と回答しているという (国際厚生事業団 2013)。したがって、国家試験に合格したからといって看護記録が書けるとは限らず、大学や専門学校の卒業までの間に看護記録の書き方を体系的に学んでおくことは極めて重要である。

一方で、看護系留学生のために開発されているテキストは存在しない。看護の知識をすでに持っている EPA による看護師候補生を対象としたテキストを、看護の知識がないことを前提として入学する留学生に応用することは難しい。また、一般に出版されている実習記録の書き方のテキストも、日本語教育の一環としてのライティング教材としては、そのほとんどは応用が難しい 。

２．研究の目的

1. で述べた状況に鑑み、本研究においては、以下の２点を主な目的とする。

(1) 看護を学ぶ留学生が授業や実習で課される課題を行うにあたっての困難点を明らかにする。
(2) 上記①の困難点を踏まえ、留学生の看護学部での学びをスムーズにするための教材を開発する。

３．研究の方法

本研究の目的達成のために行った研究は、主に３つに分けられる。

(1) 看護の実習記録における言語使用に関する研究

模範的な看護の実習記録には、どのような語彙・表現などが使われているのかを明らかにし、教材に採用することを目指した。

まず、模範的な看護の実習記録として、市販の教材を収集し、その中で、領域ごとに、模範として上がっている１点を調査対象として採用した。その教材のテキスト部分を形態素解析し、語彙の頻度、n-gram による連鎖の頻度、および、それらを使った統計的手法に基づく分析、および、目視による表現の分析を行った。

語彙については、記入項目ごとにどのような語彙・表現が使われているのかを明らかにするために、現代書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）における頻度と対照させ対数尤度比に基づく特徴度を算出、実習記録において特徴的に用いられやすい語を抽出した。

n-gram については、SOAP 形式で書かれている部分を抽出し、それぞれについて、他の項目と比較したときの対数尤度比に基づく特徴度を算出、特徴的に用いられる連鎖を抽出した。

目視による表現の分析については、接続表現を抽出し、それらの用法を明らかにした。また、類似の表現が、それぞれ別の意味で用いられているような個所について、共起する語彙などから分析をした。

(2) 看護師を目指す留学生の支援にあたる看護教員の視点から見る困難点に関する研究

看護留学生が直面する困難を看護教員はどのようにとらえているのかを明らかにするため、国内の大学において留学生と関わっている４名の教員に半構造化インタビューを行った。インタビューの結果は SCAT（大谷 2011）の手法を用いて、研究分担者と議論しながら、分析を行った。

インタビューによって示された仮説が一般化できるかを明らかにするため、後日、看護師を養成する過程を持つ大学へのアンケート調査を行った。

(3) 看護師を目指す留学生の視点から見る困難点に関する研究

看護教員に対してインタビューを行った（2）に加えて、教員が勤務する大学と同じ大学の看護学部に所属する３年生（当時）３名、および、４年生（当時）２名を対象に半構造化インタビューを行った。看護教員に対するインタビューと対照させるため、(2) のインタビ

ューと同様の質問を行った。インタビュー結果についても（2）と同様にSCAT（大谷 2011）の手法を用いて分析を行った。

４．研究成果

得られた研究成果を、研究方法の(1)、(2)、(3)それぞれに分けて述べる。また、最後に研究成果を基に作成した教材について述べる。

(1) 看護の実習記録における言語使用に関する研究

実習記録の模範例が掲載されている看護学生向け教材を対象に、そこで用いられている語彙調査を行った。その結果、記入様式ごとに、また、記入様式に含まれる項目ごとに、使用されている語彙の様相が異なることが分かった。品詞ごとに見ると名詞が過半数を超えるような項目（「アセスメント」の「Aデータ」、「看護計画」の 「C-P」、「実施・評価」の「実施計画」および0データ）があった。また、書く内容によって特徴語が異なることが分かった。名詞のみだけでなく、例えば、助動詞の「た」が含まれる項目があるなど、記述方法の指導への応用に繋がるような示唆が得られた。また、日本語教育語彙表（Sunakawa et al. 2012)を用い、日本語教育で扱われている可能性のある語がどのくらいあるかを調べたところ、述べ語数の76.2%、異なり語数の 82.8%が日本語教育で扱われていることが分かった。このことから、実習記録の記述には、語彙の知識を得ることよりも、既に持っている語彙の知識をどのように活用するのかが重要であることが示唆された。

また、記入様式のうち「アセスメント」において、どのような接続表現が用いられているのかを分析した。「アセスメント」は、患者の言葉を直接引用して記述する主観的データ（S）と、検査データや観察の結果など客観的な内容を箇条書きで記述する客観的データ(O)に基づいてアセスメント(A)を行うものである。アセスメント（A）は、複数の文に跨がって根拠と解釈・判断が記述されていることが多いことから、使用される接続表現の特徴を示すことが、留学生の支援につながると考えた。その結果、「反対陳述」、「結果提示」、「帰結」、「列挙」が接続表現全体の 94.4%を占めており、使用される接続表現自体も限定されていることが分かった。また、接続表現がなくても、連用中止系を用いて接続している例が、文全体の45.1%あった。インタビューでは、留学生は実習記録の記入の際の表現形式の記載の仕方が分からず困難を覚えている場合があると述べられていたことを考えると、支援に有益な示唆を得られたと考えられる。

同様に「アセスメント」について、どのような表現が用いられているかを明らかにするため、「アセスメント」の様式の各項目（S，O，A）に特徴的に用いられる連鎖を形態素n-gramを用いて分析した。Sに特徴的な表現としては、「ています」のようなアスペクト形式が抽出された。患者の習慣や、患者が心がけていることを記述していた。Oに特徴的な表現としては、アスペクト形式として「行っている」が抽出され、患者の特定の動作について、その描写をするために用いられていた。A に特徴的な表現としては「必要がある」「可能性がある」のような解釈や判断を表す表現が抽出された。「必要がある」については「ていく必要がある」という表現が抽出され、これから行うことを根拠とともに述べていた。また、「ことで」「ことから」を用いて論理的な記述が行われていた。

類似の表現の使い分けについても検討した。「アセスメント」において、「Nがある」と「Nがみられる」が同様の意味で使われているように思われたため、どのような語が共起しやすいかを調べた。その結果、「Nがみられる」については「目視で確認できること」に用いられていた。また、「Nがある」については、「目視では確認することが難しいこと」に用いられていた。

(2) 看護師を目指す留学生の支援にあたる看護教員の視点から見る困難点に関する研究

看護教員へのインタビューからは、以下のことが明らかとなった。

看護留学生は将来の業務においても、看護師を養成する課程においても、一般的な日本語とは異なる日本語を用いてライティング活動を行うことが求められている。しかし、ライティング教育に注力しすぎると、看護教育で求められることの本質から離れ、教育内容が形骸化してしまう懸念が語られていた。ただ、ライティング指導を受けた留学生については、演習などにおける課題遂行能力と日本語能力の双方から評価をするような語りが見られた。

また、ライティングに関連したこととして、場面や状況にあわせ、書き言葉と話し言葉とを調整することの必要性についても語られた。また、看護教員は「書く」ことは「話す」ことなどに比べ、難しいことであるととらえている。「話す」ことが十分にできないという評価を看護教員がした場合、留学生の日本語能力全体や専門に関わる能力について、適切でない評価をされてしまう可能性もある。

次に、インタビューから導きだせることが、インタビューを行った大学固有のことであるのか、または、留学生が在籍する他の大学でも同様であるのかについて検討するために行ったアンケート結果について述べる。アンケートには、38 名より回答が得られ、「学部/学科の留学生に対して教育活動を行っている」と回答した23 名分を今回の分析対象とした。回答者の 82.6%は看護の現場や看護教育で使われる日本語が、看護留学生にとって「難しい」と認識していた。また、その理由として、専門用語や略語、医療現場特有の表現に関する理解が難しいことをあげていた。授業形態による難易度の高い日本語能力については、「講義」は「聞く」（11 名、47.8%）、「演習」は「書く」（12 名、52.2%）、「実習」は「話す」（12 名、52.2%）を選択する人が最も多かった。

看護留学生の能力に合わせた授業展開をすることについては、13 名(56.5%)が否定的な回答をし、うち 8 名が「授業の進度と深度に影響が及ぶ可能性」を懸念していた。

上記の結果から、他大学の教員も、看護教育で用いられる日本語は難易度が高く、授業形態ごとに求められる日本語能力も異なると捉えていることが分かった。看護留学生が学修目標に到達するためには、授業の形態やその内容を踏まえた日本語能力を獲得する必要があると考えられる。

(3) 看護師を目指す留学生の視点から見る困難点に関する研究

看護師を目指す留学生へのインタビューからは以下の点が明らかになった。

入学当初から２年次までの間は一般的なレポートを書くことが多く、実習が増える 3、４年次では、書く場面や、求められる内容が変化していくことが語られた。また、同じ種類の課題であっても、授業ごと、また、実習ごとに書くべき内容が異なっており、実習において課される記録には、複数の形式があることが語られていた。また、形式のみならず、記入項目も異なっており、それぞれに対応して書いていく必要があるとの語りもあった。さらに、授業においても現場を想定して書かなければいけない場合があるということであった。

留学生が直面している困難については、大きく分けると、形式的なもの、内容的なもの、語彙的なものがあった。形式的なものについては、求められる課題の種類に応じて適切な言語形式を選ぶことが難しいと語られていた。難しいと考える理由として、これまでの日本語教育では、指定された様式に記入することについて学ぶ機会がなかったことが挙げられていた。内容的なものについては、看護教育に直接関わるようなことが語られた。看護教育において求められる思考過程を適切に理解し、実践することが難しいようであった。語彙については、外来語や、類義語の難しさがあるとのことだった。またベトナム語母語話者からは漢字の難しさが指摘された。

受けた支援や工夫についての語りでは、作文の添削を受けたり、留学生を集めて分からないところを聞いたりする機会が看護教員から設けられたこと、留学生それぞれが、困難を克服するために様々な工夫を行っていることが分かった。ただ、看護教員による支援は属人的なものであり、その教員の異動に伴いなくなってしまったようであった。一方で、学科全体の支援として、留学生に日本人学生のサポーターを付けることが行われ、学習面や生活面においてのサポーターから支援を得ていたようだった。工夫については、同じ母語の留学生に聞いたり、日本人の友人に聞いたりするというようなことや、インターネットなどを使って調べたりするなどが挙げられた。留学生によっては、将来を見据え、国家試験に向けた勉強をしたり、母語の患者に対応する可能性を考え、母語でも用語を覚えようとする姿勢が見られた。

＜引用文献＞

大谷尚. (2011). SCAT:Steps for coding and Theorization: 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法. 感性工学：日本感性工学会論文誌, *10*(3), 155-160.

Sunakawa, Y., Lee, J., & Takahara, M. (2012). The Construction of a Database to Support the Compilation of Japanese Learners' Dictionaries. Acta Linguistica Asiatica, 2(2), 97-115. https://doi.org/10.4312/ala.2.2.97-115

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 山元一晃・浅川翔子・加藤林太郎	４．巻 18(2)
２．論文標題 手本となる看護実習記録の「情報収集」から「アセスメント」への展開における短単位n-gramと対数尤度比を用いた特徴的な表現の分析	５．発行年 2022年
３．雑誌名 金城学院大学論集 人文科学編	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山元一晃・浅川翔子・加藤林太郎	４．巻 18(1)
２．論文標題 看護師を目指す留学生のためのライティング教材の開発とその活用	５．発行年 2021年
３．雑誌名 金城学院大学論集 人文科学編	６．最初と最後の頁 129-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山元一晃，浅川翔子，加藤林太郎	４．巻 23(2)
２．論文標題 看護実習記録に用いられる語彙の特徴の分析	５．発行年 2021年
３．雑誌名 社会言語科学	６．最初と最後の頁 67-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19024/jajls.23.2_67	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 加藤林太郎，浅川翔子，山元一晃	４．巻 4(2)
２．論文標題 看護教員へのインタビューからみる看護留学生の学びにおける困難とは -看護留学生向けライティング教材開発を念頭に-	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本国際看護学会誌	６．最初と最後の頁 23-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 加藤林太郎・山元一晃・浅川翔子	4．巻 27
2．論文標題 看護系留学生のためのライティング教材開発 -電子カルテ等からの情報収集による課題遂行を中心に-	5．発行年 2019年
3．雑誌名 早稲田日本語教育学	6．最初と最後の頁 31-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 山元一晃・加藤林太郎
2．発表標題 看護教員と看護留学生が日本語教員に求めることとは-看護学部でのインタビュー調査から-
3．学会等名 2022年度日本語教育学会春季大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 山元一晃・加藤林太郎・浅川翔子
2．発表標題 看護師を目指す留学生が直面する困難とは―ライティング教材開発のためのインタビュー調査から―
3．学会等名 社会言語科学会第46回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 浅川翔子・山元一晃・加藤林太郎
2．発表標題 看護師を目指す外国人留学生に対する教育の現状に関するアンケート調査
3．学会等名 第32回 日本医学看護学教育学会
4．発表年 2022年

１．発表者名 山元一晃・加藤林太郎・浅川翔子
２．発表標題 看護師を目指す留学生のためのライティング教材のメリットとデメリット -留学生へのインタビューから-
３．学会等名 第24回 専門日本語教育学会研究討論会
４．発表年 2022年

１．発表者名 山元一晃
２．発表標題 日本語教育に活かすための看護師国家試験におけるカタカナ語の様相の分析
３．学会等名 社会言語科学会第45回大会発表
４．発表年 2021年

１．発表者名 YAMAMOTO Kazuaki, ASAKAWA Shoko, KATO Rintaro
２．発表標題 How broad should be the vocabulary knowledge to write effectively practice nursing records?
３．学会等名 The 11th International Conference on Practical Linguistics of Japanese（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 山元一晃
２．発表標題 看護実習記録における「Nがみられる」と「Nがある」の使い分けについて
３．学会等名 語用論学会第23回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 YAMAMOTO Kazuaki, KATO Rintaro, ASAKAWA Shoko
２．発表標題 What are the writing challenges faced by international nursing students in Japan?
３．学会等名 Transcultural Nursing Society Conference in Japan（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 山元一晃
２．発表標題 看護実習記録の「アセスメント」 における記述の特徴―接続表現 に着目して―
３．学会等名 2020年度日本語教育学会春季大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 山元一晃・浅川翔子・加藤林太郎
２．発表標題 短単位n-gramを用いた看護実習記録の「情報収集」から「アセスメント」への展開における表現の分析
３．学会等名 第44回社会言語科学会研究大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 山元一晃・加藤林太郎
２．発表標題 看護の実習記録の表現の分析－留学生への支援のために－
３．学会等名 2019年度日本語教育学会秋季大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山元一晃・加藤林太郎・浅川翔子
２．発表標題 医療専門職を目指す留学生のためのアカデミックライティング教材の開発
３．学会等名 第9回国際医療福祉大学学会学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山元一晃・浅川翔子
２．発表標題 手本となる実習記録の語彙の特徴の分析
３．学会等名 言語資源活用ワークショップ2019
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

看護師を目指す留学生のための教材開発プロジェクト https://kango.page/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	浅川　翔子 (ASAKAWA Shoko) (50804118)	慶應義塾大学・看護医療学部（信濃町）・助教 (32612)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	加藤　林太郎 (KATO Rintaro) (00803355)	国際医療福祉大学・留学生別科・助教 (32206)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関